

論文審査の結果要旨

論文提出者 串田純一

本論文は、中期ハイデガーにおける形而上学的存在論を「生命の哲学」として解釈しなおすことによって、その意義と射程を明らかにしようとするものである。

ハイデガーの哲学が前期から後期まで一貫して「存在とはなにか」を問題にする存在論を中心として展開されたものであることはよく知られている。そのなかで、モノの存在、道具の存在、そして人間存在など、これら存在者の存在のあり方は繰り返し論じられるが、動物などの生物の存在が際立った仕方で主題化されることはほとんどなかった。ところが、ハイデガーの死後に公刊された1929年から30年にかけての講義録『形而上学の根本概念』のなかでハイデガーは動物の存在に関して大変興味深い議論を展開し、次のようなテーゼを提出している。すなわち、「石には世界がない」「人間は世界を形成する」「動物は世界が貧しい」というテーゼである。

串田氏の本論文は、この「動物は世界が貧しい」というテーゼに焦点を当て、それに対する独特の解釈を示し、ひいてはハイデガーの哲学を生命論として読みかえる可能性を示そうとするものである。

この試みによって、第一に、ハイデガーの哲学のなかでは、アリストテレスの可能態（デュナミス）として用いられていた概念が生命過程を説明するために用いられる「脱抑止」という概念に対応することが示され、ハイデガー哲学のなかに一つの生物学の哲学の契機が潜んでいることを示すことができる。第二には、こうした生命に関する概念を用いることによって、ハイデガー哲学の中心的課題である基礎存在論とメタ存在論の関係についても生命概念を基軸にして一定の見通しをつけることが可能となる。さらに串田氏は、こうした生命論の延長にハイデガーの言語論を位置づけようとする大変意欲的な展望をも示している。以下では章ごとに簡単な内容を概観する。

まず序章では、ハイデガーの生命論、動物論が現代哲学・現代思想のなかで占めている位置が示される。とりわけデリダによる『精神について』という論考がひとつの参照項とされる。この論考では、ハイデガーは「動物は世界が貧しい」という仕方であくまで人間における世界理解をもとに動物を位置づけており、その点で人間中心主義を脱しきれていない点が批判されねばならないとされる。それに対して串田氏によれば、ハイデガーの生命論は必ずしも通常の意味での人間中心主義には収まらない点が示されうるのであり、この点を示すことが本論文の課題となるのである。

第一章では、ハイデガーにおける形而上学的存在論の根本問題が示される。ハイデガーに

よるとヨーロッパの形而上学は一貫して、存在の意味を問う「存在論」とそうした存在の根拠を問う「神学」という二つの契機からなっており、形而上学の歴史はこの二つの契機が多様な姿をとって展開する歴史と解釈される。そのなかにはカントにおける超越論的観点と経験的観点との二重性や、さらには、ハイデガーにおける「基礎存在論」と、基礎存在論の基盤となる存在者である人間を含めた存在を問題にする「メタ存在論」との二重性も含まれることになる。こうしてハイデガーの形而上学における根本問題として基礎存在論とメタ存在論の関係をどのように解釈するかという問題が取り出され、その問題への解答を示すものとして生命概念の位置が考えられることになる。ハイデガーにおける生命論はこの意味で、形而上学の根本問題への回答の位置を占めうるものなのである。

第二章では、ハイデガーの生命論における基本テーゼ「動物は世界が貧しい」が集中的に論じられる。串田氏はこのテーゼを動物それ自体に関する存在論のテーゼとみなすのではなく、人間の側からの生物理解のあり方を示すものとして解釈することが目指される。つまり、このテーゼをたんに動物とは何かを規定したものとしてではなく、あくまで動物を理解する人間の側のもつ理解の仕方を示すものとして、この意味で「超越論的観点」を示すものとして解釈すべきであるという議論が展開される。そしてこの理解の仕方を特徴づける概念として、あらゆる段階の生命現象に見てとられる「脱抑止」という概念が取り出される。串田氏によると、(現代の)生物学は、一方ではそれぞれの生物が一定の環境世界のなかに生きていることを前提として出発しながら、その生命現象を解明するためにはそうした世界との連関を断ち切るような実験的介入を行うことによって、実際には生物が一定の方向性をはらんだ全体連関のなかに「とらわれて」おり、そのなかで「脱抑止」の連関が生み出す動きに従っていることを示しているのである。以上のような意味で、「動物は世界が貧しい」というテーゼが解釈されることになり、串田氏はこのような解釈のもとにある生命論を「超越論的なく生命の哲学」と呼んでいる。この解釈は、串田氏独自のものであり、さまざまな異論の可能性は排除できないが、一定の説得力をもって示されていることは間違いないだろう。

続いて第3章では、人間による生物の理解の仕方自身が、世界のなかで生じる生命活動と見なしうることが取り上げられる。この点を示すために、串田氏はハイデガーのほかのテクニストを参照しながら、ハイデガーによるシェラー批判、ライプニッツのモノイド論解釈、そしてとりわけアリストテレスの可能態(デュナミス)概念の解釈を取り上げて、人間の存在のあり方自体を世界に潜在する可能的なあり方に応答しながら、その可能性を現実化へと「脱抑止」する生命活動とみなしうることを論じる。加えて、世界が全体として問題にされる可能性として情動の位置が必須の役割を演じることが示される。こうして串田氏によると、ハイデガーにおける基礎存在論とメタ存在論の関係が生命概念を基軸にして統一的理解にもたらされるというわけである。

以上の二つの章が本論文の中心であるが、最後の第4章では、こうした議論がハイデガーの言語論にどのようにつながるかを、おもにリルケの詩論を通して示すことが目指される。

人間の言語活動もまた世界の可能性のあり方に応答する人間の生命活動のひとつとして解釈されうるのである。

以上のように、串田氏の議論はハイデガーにおける形而上学の根本問題を生命概念を軸にして一貫して解釈しようとする試みとしてこれまでの研究には見られない独自の視点と議論の幅広さを持っている。この点が大いに評価された。

他方で、それぞれの論点に対しては、「脱抑止」概念には不明確さが残るのではないか、ハイデガーにおける「超越論的」という概念の解釈には更なる議論が必要ではないか、あるいは、現代生物学への考慮が不十分ではないか、最後の言語論の位置づけは適切か、など、さまざまな異論がさしはさみうる点が審査委員から指摘された。しかし同時に、そうした異論の可能性は本論文の意義を必ずしも損なうものではないと考えられるというのが審査委員の一致した意見である。

したがって、本審査委員会は、本論文は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。